Japan
Food
Research
Laboratories

試　験　報　告　書

第　103030669-001　号
2003年（平成 15年）04月24日

依　頼　者　　オーブス株式会社

検　　体　　W'PHIXZ-VOC液

試 験 項 目　　マウスを用いた急性経口毒性試験

2003年（平成15年）03月05日当センターに提出された
上記検体について試験した結果は次のとおりです。

財団法人
日本食品分析センター
東京本部　〒151-0062　東京都渋谷区元代々木町52番1号
大阪支所　〒564-0051　大阪府吹田市豊津町3番1号
名古屋支所　〒460-0011　名古屋市中区大須4丁目5番13号
九州支所　〒812-0034　福岡市博多区下呉服町1番12号
多摩研究所　〒206-0025　東京都多摩市永山6丁目11番10号
千歳研究所　〒066-0052　北海道千歳市文京2丁目3番

本報告書を他に掲載するときは当センターの承認を受けて下さい。

1　試験目的

検体について，OECD Guidelines for the Testing of Chemicals 401(1987)に準拠し，マウスにおける急性経口毒性を調べる。

2　検　　体

W'PHIXZ-VOC液

性状：無色透明液体

3　試験動物

4週齢のICR系雌雄マウスを日本エスエルシー株式会社から購入し，約1週間の予備飼育を行って一般状態に異常のないことを確認した後，試験に使用した。試験動物はポリカーボネート製ケージに各5匹収容し，室温23 ℃±2 ℃，照明時間12時間/日に設定した飼育室において飼育した。飼料[マウス，ラット用固型飼料；ラボMRストック，日本農産工業株式会社]及び飲料水(水道水)は自由に摂取させた。

4　試験方法

試験群及び対照群ともに雌雄それぞれ10匹を用いた。

投与前に約4時間試験動物を絶食させた。体重を測定した後，試験群には雌雄ともに検体投与量として20 mL/kgの用量を胃ゾンデを用いて強制単回経口投与した。対照群には雄では0.7 mL，雌では0.6 mLの純水を同様に投与した。

観察期間は14日間とし，投与日は頻回，翌日から1日1回の観察を行った。投与後7及び14日に体重を測定し，t-検定により有意水準5 %で群間の比較を行った。観察期間終了時に動物すべてを剖検した。

5 試験結果

1) 死亡例

雌雄ともに観察期間中に死亡例は認められなかった。

2) 一般状態

雌雄ともに観察期間中に異常は見られなかった。

3) 体重変化(表-1及び2)

投与後7及び14日の体重測定では，雌雄ともに各群間で体重増加に差は見られなかった。

4) 剖検所見

観察期間終了時の剖検では，雌雄ともにすべての試験動物の主要臓器に異常は見られなかった。

6 考 察

検体について，OECD Guidelines for the Testing of Chemicals 401(1987)に準拠し，マウスを用いた急性経口毒性試験(限度試験)を実施した。

本ガイドラインでは，被験物質が水溶液の場合，投与量は体重100 g当たり2 mL (20 mL/kg)を超えるべきではないと指示している。本試験ではこの用量で死亡例は認められず，剖検時にも異常は見られなかった。したがって，検体のマウスにおける単回経口投与によるLD50値は，雌雄ともに20 mL/kg以上であるものと考えられた。

表-1　体重変化(雄)

投与群	投与前	投与後(日)	
		7	14
試験群	29.0±1.1 (10)	33.8±1.4 (10)	37.4±2.1 (10)
対照群	28.8±1.1 (10)	34.1±1.9 (10)	37.1±2.0 (10)

体重は平均値±標準偏差で表した(単位：g)。
括弧内に動物数を示した。

表-2　体重変化(雌)

投与群	投与前	投与後(日)	
		7	14
試験群	25.9±1.1 (10)	28.3±1.2 (10)	31.8±2.7 (10)
対照群	25.6±1.0 (10)	27.5±1.8 (10)	29.5±1.8 (10)

体重は平均値±標準偏差で表した(単位：g)。
括弧内に動物数を示した。

以　上